

「Merde!」の間投詞的用法に関する研究

楊 鶴

1. はじめに

本稿は、フランス語の罵倒表現の一つである「merde!」について考察する。罵倒表現とは、罵り、脅し、悪口、侮辱、蔑み、けなし、非難、批判、差別などの総称である。¹⁾ フランス語の罵倒表現には、性、死、人間以下の存在（動物や野獣への喩え）、卑しいとされる職業（娼婦等）などの語彙が多数含まれており、下品な表現として普通は回避される。²⁾ しかし、実際に口論の場において、相手に罵倒語を浴びせて非難したり、相手に不愉快な態度を見せたりすることもある。また、相手に向かわなくとも、思うように事態が運ばない場合には、その状況をけなしたり、罵ったりすることもある。フランス語では、前者のような人に浴びせる罵倒を「insulte」、あるいは「injure」（侮蔑）と呼び、後者のように状況をけなす場合は「juron」（罵り）と呼ぶ。

「Merde!」は、現代フランス語では日常的に頻用されており、下品な罵り言葉として広く認識されている（Edouard 1967）。³⁾ また、伝統的には「m...」のように伏せ字⁴⁾で表現されることもあり、家庭内や学校においてもタブーの言葉とされてきた。しかし、実際の会話において、「merde」は下品な言葉ではあるが、必ずしも罵りや侮辱を表す言葉ではなく、ある事柄に対しての感情的な反応や物事への賞賛を表す間投詞として用いられることも観察される。

本稿では、罵り、憤慨、賞賛など多様な表現価値をもつ「merde」の意味の関係性について考察し、「merde」の持つ本来的な意味機能を論じたい。そのためには、まず「merde」の名詞としての基本的用法を確認し、次に比喩的解釈による相手に対する侮辱（insulte）、事柄に対する罵り（juron）を観察し、間投詞としての「merde!」の実際の用法を考察する。これらを分析することにより、用法間の関係性について明らかにすることを試みる。観察の際には、フランス語話し言葉コーパスや独自で収集したコーパスから抜粋した事例をもとに、「merde」の使用状況や出現場面を考慮していく。なお、「merde」に対応する一定の日本語訳を付けるのは難しく（Iwauchi 2006）、場面によって、様々な日本語訳を使い分けなければならない。本稿では、その都度ふさわしいと思われる訳を付けるようにする。

2. 用法の考察

2. 1. 名詞としての「merde」

名詞としての「merde」が持つ実質的な意味は、たとえば、以下のような例が観察される。

(1) Un jour, c'est elle qui lui a dit, je l'ai entendu : « Ah ! je t'aime Julien, tellement, que je te boufferais ta merde, même si tu faisais des étrons grands comme ça... »

(Céline, *Voyage au bout de la nuit*, 1932)

(ある日、彼女の方から彼に言った、それを私は聞いた：「あ！愛しているのよ、ジュリアン、すごく、あなたの便をほおぼってしまうほどに、こんなに大きな便であったとしてもね...」)

(2) Une merde de chien / Crottes de chien

(Rey-Debove & Rey, *Le nouveau petit robert*, 2003)

(犬の糞／犬の糞)

(1) と (2) では、「merde」は「(人または動物の) 排泄物」という実質的な意味で使用されており、物事や事態に対しての記述である。したがって、(1) では étrons、(2) では crottes のように、同様に「排泄物 (糞／便)」の意味を持つ語彙との置き換えが可能である。

2. 2. 比喩としての « merde »

名詞としての « merde » の指示的意味である「排泄物」には、臭くて汚らわしいもの、触れたくないものというマイナス価値が伴う。その場合は、名詞の持つ実質的意味から派生して、内包だけを取り出し、比喩的意味を派生することができる。

(3) En fait on mange de la merde quoi

(ESLO2_REPAS_1261)

(クソを食べているようなもんだね)

(4) Tu vas avoir une vie de merde

(Pascal Le Grand Frère - Anaïs)

(君はクソみたいな人生を送ることになるよ)

(3) では、床に落ちた食品をそのまま客に提供するストランに対しての発話であり、普通であれば口にしない「糞」のような不衛生なものを食べていることを表し、(4) では、「クズ (クソ) のような人生」を表している。このように、「糞」に喩えることで « merde » の持つ「臭くて汚いもの」、または「嫌悪を引き起こすもの」という内包的な意味が引き出され、「避けるべきもの」、「忌々しいもの」などの比喩的解釈を広げていくものと考えられる。そのため、物事や行為に対して使用した際は、その価値を貶めた内包的表現として理解することができる。

2. 3. 罵り (insulte) としての « merde »

しかし、(5) や (6) のように、物事や行為ではなく、人物を「排泄物」に喩えて比喩的に使用する場合は、他人の価値や地位を貶める表現となる。このような表現を他人に向かって発話することで、相手に対しての侮辱、軽蔑、罵り (insulte) などを表す罵倒表現となる。

(5) T'es une grosse merde

(SOS Ma Famille à Besoin D'aide - Charlyne)

(君はクソみたいな人間だね)

(6) Tu m'as parlé comme une merde hier

(SOS Ma Famille à Besoin D'aide - Charlyne)

(お前は昨日私にクソみたいな話し方をした)

下品な言葉が罵り行為として成立するには、罵る相手の存在が必要不可欠である (Lagorgette & Larrivée 2004)。⁵⁾ Anscombe (2009) は「罵り (insulte) とは、聞き手を評価するものであり、その聞き手は有生でも無生でもかまわない」と述べている。⁶⁾ つまり、罵りは物事、または人物に向かって行わ

れる。ただし、人物に向かって発した場合、より暴力的で攻撃性が強いものと思われる。さらに Anscombe (2009) は、「ネガティブな発言が含まれているからといって必ずしも罵りとは限らない」と論じている。⁷⁾ この点に関しては、話者同士が親しい関係であることや冗談や皮肉を交えた発話であることが考えられる。⁸⁾

以上、名詞としての「merde」の実質的用法、比喩的用法、および罵り表現としての用法を検討した。この語は、単に物を指示するだけでなく、常に嫌悪、忌避などのマイナス価値が随伴することが特徴である。

2. 4. 間投詞としての「merde！」

名詞的用法とは別に、「merde」は間投詞として用いられることがある。Anscombe (2009) は、「merde」のような言葉を「ある状態に対しての話者の反応を表す間投詞」と特徴づけている。⁹⁾ 本稿では、Anscombe にしたがって、実際に「merde！」をある困惑な事態、または迷惑な状態に対しての反応ととらえて分析を進めていく。

(7) *Merde j'ai oublié de boire mon thé* (ESLO2_ENT_1261)

(いけない、お茶を飲むのを忘れていた)

(8) *Merde c'était le mien* (ESLO2_ENT_1268)

(いけない、私の(ナイフ)だった)

(7) では、お茶を飲み忘れたことに対して、(8) では、自分のナイフを他人に渡してしまったことに対して、いずれも「飲まなければいけなかった」、「特定のナイフを渡さなければならなかった」という話者自身の失敗や過失に対して発話されたものであり、事態に対する話者の反応である。したがって、「crotte」や「caca」などの「排泄物」を表す言葉と置き換えると不自然となる。以上からわかるように、「merde」は人物や事柄に対する汚らわしさを比喩ではなく、時には事物や事態に対しての反応として解釈することができる。このような用例を「merde！」の間投詞的用法、¹⁰⁾ または談話マーカ儿的用法と考えることができる。¹¹⁾

以下では、とりわけ間投詞としての「merde！」に注目し、会話上におけるふるまいや機能を考察する。

3. 間投詞「merde！」の機能分析

間投詞としての「merde！」は、(2) *Une merde de chien / Crottes de chien* 「犬の糞／犬の糞」のように、文の構成要素として機能せず、独立して文の中に存在することができる。したがって、「merde！」のない文であっても、発話としては成立するが、それは、ただ話者が自身の考えを断定、または主張する文となる。「Merde！」が発話されることによって、話者は直面している事態に対して価値判断をしているといえる。観察を進めたところ、「merde！」が出現する文脈を2つのパターンに分けることができる。

まず、一つ目は実現すべき事態が非実現となった場合である。

- (9) (=7) *Merde j'ai oublié de boire mon thé* (ESLO2_ENT_1261)
 (いけない、お茶を飲み忘れた)
- (10) *Oh merde j'aurais dû lui dire* (ESLO2_ENT_1247)
 (いけない、言うておくべきだった)
- (11) L2 : *Dexter c'est fini hein* (ESLO2_ENT_1038)
 L1 : *bah y a ils vont avoir sûrement une saison six*
 L2 : *je crois pas hein je crois l'acteur il a un cancer*
 L1 : *oh merde c'est con parce que euh c'était bien*
 (デクスター (ドラマ) 終わったよね)
 (シーズン 6 が出ると思うよ)
 (いや、出ないと思う。あの俳優ガンになったらしいよ)
 (えっ、残念、すごくよかったのに)
- (12) L2 : *quand ça clignote c'est en pause* (ESLO2_ENT_1267)
 L1 : *oh merde donc là c'est bon ?*
 L2 : *ouais*
 ((録音の機械を見て) 点滅しているときは一時停止だよ)
 (あっいけない、もう大丈夫?)
 (うん)

以上の用例において、話者はいずれも自身の失敗や過失、またはある困惑な状況に対し反応を見せている。(9)(=7) では、飲もうと思っていたお茶を飲み忘れたこと、(10) では、言うておくべきことを言わなかったこと、(11) では、続くと思っていたドラマが終わってしまうこと、(12) では、録音されなければいけないが、結果的には録音されていなかったこと、これらの状況を話者が認識した際の反応として「merde!」が発話されている。したがって、話者が直面している状況とは、「本来なすべきこと、本来ならば起こらなければいけない事態が、実際には話者の思い通りに実現しなかった状況」である。「本来なすべきこと」は、言い換えれば、本来「実現すべき事態」であるが、これらの例においては、実際には実現していない。

次に、二つ目のパターンである、ある事態を回避できなかった場合を考察していく。

- (13) *Merde excusez-moi* (ESLO2_ENT_1260)
 ((食事中にコップを倒して) いけない、ごめんなさい)
- (14) *Oh merde je l'ai trop taillé du coup y a un petit trou là* (ESLO2_REPAS_1271)
 ((パンにバターをぬりながら) ヤバイ、伸ばしすぎて小さい穴が開いてしまった)
- (15) L1 : *dis donc c'est une impression ou c'est des cheveux blancs que tu as là-haut*
 L2 : *cheveux blancs*
 L1 : *ah merde* (ESLO1_REPAS_272)
 (おやまあ、勘違いなのかそれとも白髪があるのか?)

(白髪だよ)

(あちゃー)

(16) L2 : tu es sur la bande

(ESLO2_ENT_1029)

L1 : oh merde

(バンドを踏んでいるよ)

(あっいつけない)

(13) では、倒してはいけないコップを倒してしまったこと、(14) では、パンに穴をあけてしまったこと、(15) では、あるはずがないと思っていた友人の髪に白髪があったこと、(16) では、踏んでいなかったバンドを踏みつけてしまったことに対して反応を見せている。これらの用例は、「本来ならば実現してはならないこと、本来ならば起こるはずのないことが実現してしまった」状況である。「本来実現してはならないこと」とは、別の言い方をすれば「回避すべき事態」であるが、しかし実際には回避することができず、実現してしまった状況である。

以上、「実現すべき事態」が「非実現」の場合と、「回避すべき事態」が「実現済」の2つの状況において「merde」が発話されている。いずれの場合においても、話者は「merde」を発話する前の時点で、自身の思い描く理念的事態を「実現すべき事態」、または「回避すべき事態」として認識している必要がある。例えば、(9) (=7) において、話者が持つ理念的事態とは「お茶を飲まなければいけない」ことであるが、実際に起こった事態は「飲み忘れていた」ことである。このことから、話者が持つ「理念的事態」と「現実的事態」が対峙する状況において「merde」が発話されると理解できる。

間投詞としての「merde!」は、このように話者の抱く理念的事態の前提に基づいて、それとは異なる事柄の実現を再認識する機能があるということが出来る。このように「merde!」の機能を規定するならば、たとえば、(9) (=7) では、飲まなかったという結果、(10) では、言わなかったという結果を、いずれも、前提とは反対に、「飲まなければいけなかった」、「言っておけばよかった」、という失態に対する後悔、遺憾の気持ちが表現されていることが理解される。これらと同様に、(13) では、「倒してはいけないなかった」、(14) では、「穴をあけてはいけないなかった」など、話者の不都合な状態への気づきや、してしまったことに対しての申し訳なさや罪悪感が伺える。

また、Je commence à avoir faim là, merde! 「おなかすいたよ、もう!」(CbLLE_01_OG_NH_100222) のような例においては、空腹を満たすために食事をするのが話者にとって好ましい理念的事態であるため、早く現実の空腹状態から逃れたいという話者の焦りやいらだちの心情が表れているといえる。

以下の図に「merde!」が発話されるプロセスを示す。

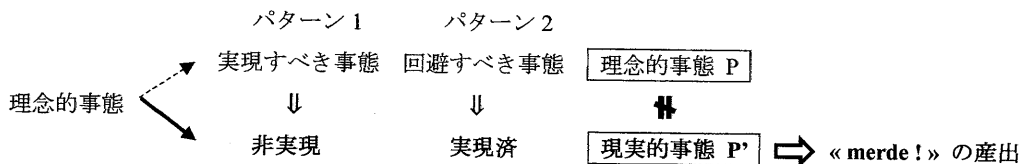


図 「Merde!」の産出プロセス

話者が持つ理念的事態 (P) とは、図 1 の点線矢印部分で示したように、話者の思い通りに事態が運ぶことである。しかし、「merde!」が出現する状況とは、話者の思い通りにいかなかった場合であり、やるべきことができなかった、またはしてはいけないことをしてしまった (二重矢印) のように、話者が持つ理念的事態とは反対の事態が起きてしまった状況であり、現実的事態 (P') である。理念的事態 (P) と現実的事態 (P') が食い違い、話者の思い通りにことが運ばず、そうであってほしくなかった現実的事態 (P') に直面した時「merde!」が発話される。

反対に言えば、「merde!」を発話したことによって現実の状況が現れ、それが話者にとって困惑する状況であることを示している。「Merde!」は、話者の現実の状況に対する価値判断を伴う反応である。

このように「merde!」を考察すると、名詞としての「merde」と間投詞としての「merde!」には意味的なつながりのあることが見て取れる。「Merde!」には、内包的価値として「汚いもの」「触りたくないもの」という否定的な価値があり、それが実体的に悪臭を放つ汚物ではなく、事態の価値付けを対象とした場合には、いわば、事態を忌避すべきものとして捉えることになると考えられる。それが「しなければならぬのに、実現できない」場合と、さらには、「忌避すべきものなのに、忌避できなかった」場合とに分かれるといえる。

4. 賞賛としての「merde!」

「Merde」は罵倒表現でありながら、必ずしも相手に対しての罵りを表さず、話者にとって回避すべき事態が起こった際の反応や評価を表すことができ、間投詞的に使用されることを考察した。この間投詞に関して、さらに 2 点を指摘しておきたい。

第 1 点は、「merde!」の感嘆、賞賛を表す用法である。

(23) *Merde ! C'était vraiment magnifique !*

(Céline, *Mort à crédit*, 1936)

(ちくしょう！本当にすごい！)

(23) はある事態が素晴らしすぎるさまを言及したものである。このような「merde!」は、ある対象の素晴らしさを前にして、いろいろ否定的にケチを言おうとしても、否の打ち所が見つからない場合の発話である。すなわち、どのように否定的な立場をとってみても、話者の評価は対象の素晴らしさという評価を回避することができないのである。結果として、「merde」はこのように、物事に対しての最高評価をすることができる。

反対に、悪い評価、ひどさを表す用法も観察される。

(24) *Merde... !*

(Cauchemar en cuisine)

((宿泊するはずのホテルが閉まっていて、扉の前で) なんてこった！ひどい！)

賞賛とは反対に、「merde!」は物の悪さや状況のひどさを表すことができる。(24) では、宿泊するはずのホテルが閉まってしまった状況を前にして何事もできない状況である。自身が望む事態の実現

が不可能であり、これ以上なすすべがない状態であり、話者の困惑や憤りの心情が表れている。

間投詞としての「merde!」は、最初に述べたように話者の持つ理念的事態と現実的事態の食い違いが見られる場面における話者の反応であると述べた。賞賛としての「merde!」もまた物事に対する反応であるが、この場合は物事への評価判断を表す間投詞として使用されている。ともに、「避けるべきものから避けられない」という点で共通している。

第2点は、ある事態ではなく、発話に対する反応としての「merde!」の用法である。話者は発話を構築していく上で修正を行いながら発話行為を行っているが、語彙の選択ミスや一時的な語彙欠陥が原因で発話が一時的に停止されることがある。自分の思うように発話が発せられない際に「merde」の挿入がみられる。たとえば、以下のような用例がある。

(25) Et tu penses que les élè- les profs les *merde* ben les parents des gamins ils vont voir euh...

(学生、いや、先生、いや、いけない、親たちがなんとかする...)

(ESLO2_ENT_1234)

(26) Elles sont vraiment superbes quoi euh je me souviens d'une euh d'une musique qui s'appelait euh non *merde* c'est le groupe qui s'appelait Sonata Arctica et euh alors la pochette elle était magnifique

(本当に美しいの。なんとなかっていう音楽、あついけない、(音楽じゃなくて) グループ、ソナタ・アークティカというグループ、(CD) ジャケットがとてもすばらしかった)

(CbLLE_03Gael)

(25) では、「les élè-」、*« les profs »* と言葉を変えながら、本来の発話にたどり着き *« les parents des gamins »* を産出している。(26) では *« musique »* を *« groupe »* に訂正している。このように、ある事柄に対してではなく、自身の発話上の訂正においても *« merde »* の使用が認められた。いずれにおいても、言い間違えたことが話者にとって回避すべきだったことで *« merde »* が発話されたと説明できるように思われる。

5. 罵り場面における「merde!」

ここまで考察してきた「merde!」は、いずれも普段の会話状況において発話されたものである。人物を「糞」に喩え、「merde」を名詞的に使用した場合、他人をさげすんだ罵倒表現となり、多くの場合口論場面にみられる。以下では、実際の口論場面における「merde!」のふるまいについて考察する。

(27) Père : moi j'ai fait des gosses (c'est) pas pour qu'ils m'insultent d'accord

Bixente : ah bha c'est con c'est arrivé tiens

Père : et voilà

Bixente : *merde* c'est con t'as fait les mauvais t'as fait les mauvais

(Pascal Le Grand Frère - Bixente)

(子供を作ったのは俺のことを罵倒させるためではない、いいか)

(あードジったね、そうなっちゃったよほら)

(まったくだよ)

(くそったれ！気の毒だね！悪いの作ったね、悪いの作っちゃったね)

(27) では、父親と息子 (Bixente) が口論をしている。このような口論場面に見られる «merde!» は実質的意味、比喩的解釈のどちらにも当てはまらない。この用例において、父親は「暴言を吐くのはおかしい」と息子を非難し、息子は2回目の発話ターンで «merde!» と発話し、父親に対しての反発を見せている。「あいにく、俺のような不良息子を持ったな、残念だったな」といった具合で反論することで、さらに父親を困らせる状況を作り出そうとしている。

口論場面では、話し手も聞き手も好ましくない状況に置かれており、困惑する事態に直面している。Lagorgette & Larivière (2004) が述べるように、罵倒行為には聞き手の存在が必要であり、他人に対して否定的な価値判断をすることである。¹² つまり、口論において、どれだけ相手を自分より下の立場に位置づけ、貶められるかがポイントとなる。このことから、息子は1回目ではなく、2回目の発話ターンで «merde!» を発話し、「汚らわしさ」という実質的強い意味をもつ «merde!» を発話することで、さらに父親を追い込み、貶めようとしている。

普通の会話にみられる «merde!» の間投詞用法では、自身の失敗やある困惑事態に対する反応と捉えられることができるが、口論場面における «merde!» は相手に侮辱されたという事態、または口論状況そのものに対する不満や憤慨であると解釈することができる。

このように考察すると、口論場面では、「t'es une grosse merde」(君はクソみないな人間だね) のように、相手を「糞」に喩えて直接罵るのではなく、口論という好ましくない事態の中に置かれている相手に対して、間接的に罵倒行為を行っているとして理解することができる。

6. おわりに

本稿では、実質的意味、内包的価値、比喩的表現としての «merde» から、間投詞としての用法、賞賛としての用法に至るまで、「merde!» の用法について概観した。

フランス語口語において頻用されている «merde» は、罵りを表す言葉であるが、多くの場合事柄に対する反応、他人に対する反応であり、間投詞的に使用されていることがわかった。両者において、本来実現すべき事態が実現しなかった場合と、避けなければならない事態が実現してしまった際に使用が認められた。「Merde» は話者が事態に対して判断し、自身が置かれている状況を再認識し、事態を再定義する機能があり、常に話者の感情的振る舞いが随伴する。

本稿では論及できなかったが、「merde» には試験などの成功を祈願するような場面で、「健闘を祈る」という定型表現の形で «merde» を使用することがある。このように、相手の成功祈願や冗談、皮肉の際に使われる用法の考察は今後の課題としたい。

注

¹⁾ « violence verbale » (Moïse 2009), « insulte » (Lagorgette 2003, Cousin 2003, Anscombre 2009), « injure » (Larguèche 2009, Lagorgette 2012), « juron » (Fracchiolla 2011), « formule » (Anscombre 1985a, 1985b),

- « axiologique négatif » (Kerbrat-Orecchioni 1980), « insulte, injure, invective, apostrophe, vanne, juron, blasphème, gros mot, incivilité, outrage » (Lagorgette & Larrivée 2004)
- ²⁾ 性に関するものとしては、「casse-couille」(直訳は辜丸つぶし)は「うんざり」の意味。「(Tu me) casse(s) les couilles !」(「おまえには) うんざりだ、いらいらさせられる) のように使用される。「Con」(直訳は女性性器)は「馬鹿」の意味。排泄物に関しては、「merde」(直訳は糞、うんこ)は「クソっ、畜生」を意味する。「Chier」(糞をする)は「困らせる」の意味となり、「tu me fais chier」(お前うざいよ)のように用いられる。動物に関しては例えば「morpion」(直訳はケジラミ)は「小僧、ガキ」の意味。卑しい職業に関しては、「putain」(売春婦)、「bordel」(売春宿)などがある。
- ³⁾ Ce petit mot de cinq lettres qui est non seulement la clé de voûte de notre vocabulaire injurieux mais aussi celui de la conversation la plus banale dans toutes les contrées du monde où l'on parle une langue qui, si elle fut celle de Ronsard et de Corneille, fut aussi celle de Rabelais et de Victor Hugo. (Edourad 1967, pp.213)
- ⁴⁾ « Vous êtes de la m... dans un bas de soie », mot de Napoléon à Talleyrand. (*Le nouveau petit robert* 2003, p.1612)
- ⁵⁾ L'insulte suppose un destinataire, elle a une fonction d'adresse. (Lagorgette & Larrivée 2004, pp.7)
- ⁶⁾ (Les insultes) Elles servent à qualifier l'interlocuteur, que ce soit un animé ou un inanimé. (Anscombe 2009, pp.24) 括弧内筆者加筆
- ⁷⁾ Notons que ce qui fait l'insulte n'est pas la qualification d'une entité par un trait considéré comme négatif dans un état de langue et une culture donnés. (Anscombe 2009, pp.20)
- ⁸⁾ Dès la Somme théologique, la notion d'« insulte plaisante » a été avancée 1. On pense être face à un oxymore ayant la vie dure, et pourtant il est indéniable que certaines insultes ne visent pas à accomplir l'acte d'insulter mais bien au contraire servent à marquer la solidarité dans un groupe de pairs. (Lagorgette & Larrivée 2004, pp.83)
- ⁹⁾ À la première classe appartiendraient des interjections comme Hélas, Pouah, etc., qui expriment un sentiment. À la seconde des interjections comme Flûte, Merde, etc., qui représentent une réaction face à une situation. (Anscombe 2009, pp.19)
- ¹⁰⁾ フランス語の間投詞には「alors」、「ben」、「bon」、「quoi」、「mais」、「enfin」などの語彙があり、同意、疑問、躊躇、反発といったモダリティーを持ち、発話にさまざまなニュアンスを与えている (前島 1997)
- ¹¹⁾ Les morphèmes et locutions que je désignerai comme MSC (marqueurs de structuration de la conversation) sont : au fait, à propos, ah oui + {dis-dono / dites, j'y pense, au fait), ouais mais, maintenant, quoi, alors, ben, pis, et les composés ben alors, pis alors, et alors, bon alors, alors bon, pis bon, bon pis, bon ben, ben bon, alors voilà, ben voilà, pis voilà. (Auchlin 1981) 下線筆者加筆
- ¹²⁾ L'attribution à un tiers d'un jugement de valeur négatif (ou *axiologie négative*) sous forme de syntagme nominal prend des formes spécifiques, comme dans la Langue des Signes Françaises, par exemple, où les mimiques faciales agressives n'accompagnent que l'insulte directe (Le Corre). (Lagorgette & Larrivée 2004, pp.7)

参考文献

Anscombe, J.-C. (1985a) « Onomatopées, délocutivité et autres blablas », *Revue romane* 20, pp.169-207.

- Anscombre, J.-C. (1985b) « De l'énonciation au lexique : mention, citativité, délocutivité », *Langages* 80, pp. 9-34.
- Anscombre, J.-C. (2009) « Notes pour une théorie sémantique des jurons, insultes et autres exclamatives », *Les Insultes en français : de la recherche fondamentale à ses applications (linguistique, littérature, histoire, droit)*, Université de Savoie, pp.9-30.
- Auchlin, A. (1981) « Mais hein, pis bon, ben alors, voilà, quoi! Marqueurs de structuration et complétude », *Cahiers de Linguistique Française* 2, 141-159.
- Céline, L-F. (1932) *Voyage au bout de la nuit*, Folio.
- Céline, L-F. (1936) *Mort à crédit*, Denoël et Steele.
- Cousin, M. (2003) « L'insulte décodée », *L'Express* (WEB).
- Edouard, R. (1967) *Dictionnaire des insultes, précédé d'un petit traité d'insurologie*, Paris, Tchou.
- Fracchiolla, B. (2011) « Article "injure" », *Dictionnaire de la Violence*, Puf, pp.706-710.
- Iwauchi, K. (2006) *L'agression verbale en japonais : Disputes télévisées et forum de plaintes d'enfants*. Paris : École des Hautes Études en Sciences Sociales.
- Kerbrat-Orecchioni, C. (1980) *L'énonciation : de la subjectivité dans le langage*, Paris, Armand Colin.
- Lagorgette, D. (2012) « Insulte, injure et diffamation : de la linguistique au code pénal ? », *Argumentation et Analyse du Discours* 8, en ligne.
- Lagorgette, D & Larrivée, P. (2004) « Interprétation des insultes et relations de solidarité », *Langue Française*, n144, pp.83-103.
- Lagorgette, D & Larrivée, P. (2004) « Introduction », *Langue Française*, n144, pp.3-12.
- Larguèche, É (2009) « L'injure à la trace », *Les Insultes en français : de la recherche fondamentale à ses applications (linguistique, littérature, histoire, droit)*, Université de Savoie, pp.75-93.
- Moïse, C. (2009) « Espace public et fonction de l'insulte dans la violence verbale », *Les Insultes en français : de la recherche fondamentale à ses applications (linguistique, littérature, histoire, droit)*, Université de Savoie, pp.201-217.
- Rey-Debove, J & Rey, A. (2003) *Le nouveau petit Robert : dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, Dictionnaires Le Robert.
- 前島和也 (1997) 「口語における文末の là」『フランス語学研究』 31, pp.34-39.

使用コーパス

ESLO (Enquête Sociolinguistique à Orléans)

CbLLE (Corpus-based Linguistics and Language Education)

SOS Ma Famille à Besoin D'aide

Pascal Le Grand Frère

Cauchemar en cuisine